KKK
社是
誠実な施工
技能の開発向上
安全作業の確立
原価の低減
協同による社業の繁栄

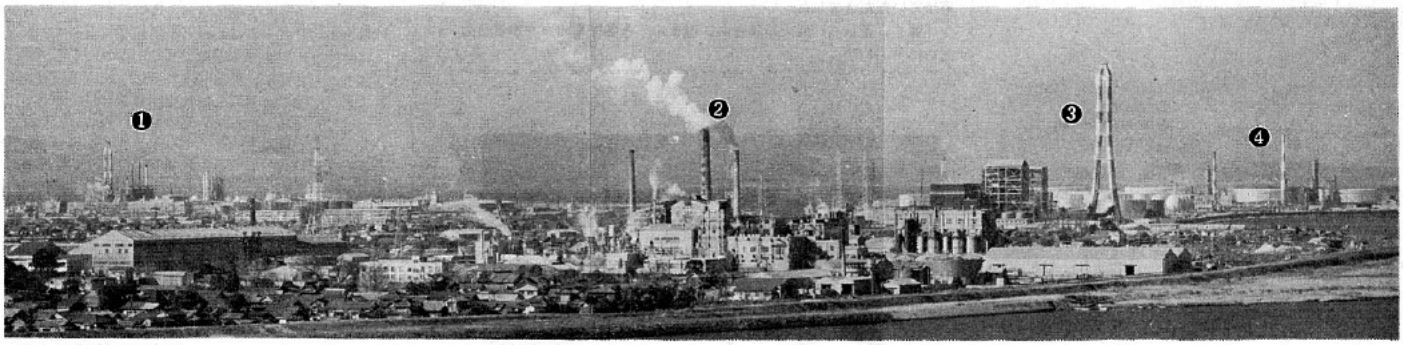
九火新聞

昭和44年9月 第49号
九州火力工事株式会社
福岡市薬院1丁目13番8号九電不動産ビル
電話代表 (77) 8881
印刷 有限会社 今井印刷所

大分1期建設が竣工

活気づく臨海工業地帯

〔写真下〕 のびゆくベルト工場地帯
① 昭和電工の石油化学コンビナート群用地
② 鶴崎パルプ本社工場
③ 九州電力大分発電所1号、建設中の同2号
④ 臨海工業地帯の原料源、九州石油大分製油所



〔大分＝7月31日〕当社が主要機器据付工事を行なってきた大分発電所1号（重油専焼、出力25万KW）が完成し営業運転に入った。

新産都市の優等生といわれる大分鶴崎臨海工業地帯の1号埋立地に完成した同発電所は、中枢動力源として、また、九州経済の推進力として重要な任務をもっている。

重専25万KW 7月31日に運開

大分発電所1号の運開によって、九電の火力発電設備の最大出力は、200万KWを突破し、206万2,000KWとなり、九州経済浮揚への期待を集めている。また、新産都市大分、鶴崎臨海工業地帯の基幹として、地域経済の発展への貢献も大きいものがあろう。

同発電所は、さる7月31日、九州で初めての重油専焼火力として、正式に営業運転に入った。当社の同1号主要機器据付工事は、43年5月14日の汽水分離器のつり揚げから本格的建設工事を始め、10月7日には水圧試験、44年3月17日に火入れとなり、4月28日通汽と順調に工程を消化し、1年2カ月余りで竣工した。

同発電所の燃料である重油は、隣接する九州石油大分製油所から直接パイプで輸送する、いわゆるコンビナート方式で供給される。また、同発電所には安全性を高めるなどで、数々の新しい技術が採用された。主なものは、①重油バーナーの自動化②電力業界で初めてのブラシレス励磁方式の発電機採用、③高さ120メートルの2缶併用の4脚集合型煙突④しゃ断器など騒音と塩害防止のため屋内変電所の採用、⑤排煙監視用テレビ、SO_2計、集じん装置、アンモニア注入装置などに23カ所のモニタリングを設置するなどがある。

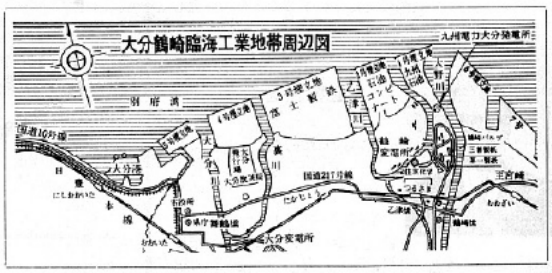
この大分1号の完成に続いて、すでに当社が建設を担当し、最盛期に入っている同2号（25万KW）が45年に、46年には唐津2号（37万5千KW）47年には苅田4号（37万5千KW）と重油専焼火力発電所が完成する予定になっているので、毎年1基づつの割合で運開されることになる。そうした意味からみると、九州は重油専焼大型火力時代に入ったわけで、大分1号の運開は、九州における重専火力のあけぼのとなったといえる。

大分発電所1号主要機器設備

〔汽缶〕▷型式＝三菱スルザーCEモノチューブボイラ（屋外型）

〔汽機〕▷型式＝串型三車室四分流排気再熱再生式蒸気タービン

〔発電機〕▷型式＝水素内部冷却横置円筒回転界磁型（ブラシレス励磁方式）



あい次ぐ新工場の操業開始

全国15を数える新産業都市の一つである東九州ベルト工業地帯の中心鶴崎地区は、大分市北部沿岸、大野川と大分川河口一帯を昭和33年から埋立てて造成し、1号地から5号地が完成し、6、7、8号地の造成が進められている。

1号地は39年4月から九州石油大分製油所がトップを切って、中近東油を主に1日10万バーレル（将来40万バーレル）の製油能力で操業をはじめ、現在各種タンク80余を並らべている。隣接して同じ1号地は運開した九電大分発電所1号があり、さらに2号が来年7月完成予定で建設中である。

2号地は、42年8月から昭和電工の石油化学コンビナートの建設がはじめられ、本年4月から本格的操業に入った。当社は、昨年同コンビナートの動力源である260T／H、40T／Hボイラの据付工事を行なっている。また、同昭和電工の2万8千KWと1万7千KW発電設備の定期検査工事を担当し、現在順調に作業が進められている。

同石油コンビナートは、1号地の九州石油からパイプラインでナフサの供給を受け、ナフサ分解センターである鶴崎油化がエチレン、プロピレン、ブチレン、ブタン、ブタジエン、分解油などに分解して、各誘導品工場に供給している。これらのコンビナート参加企業は、鶴崎油化を中心に、日本オレフィン化学、昭和アセチル化学、高分子化学工業、AAケミカル、鶴崎サンソセンター、鶴崎共同動力、昭和工事の昭和グループ、と八幡化学、日油化学の関連会社である。コンビナートであるため中枢をなす鶴崎油化、鶴崎共同動力、昭和工事、共通事務処理役の昭電大分事務所を中心に、各企業が放射線に配置されている。これは電気蒸気、工業用水などの集中共同利用化を進めて、エネルギーバランス、安全操業を計り、コンビナートの経済性と安定性で大きな効果をねらったものである。

3、4号地は、富士製鉄の建設本部が、さる7月1日発足し、容積3千500立方メートル規模の高炉2基を建設する予定で、早ければ今年10月に着工するもよう。

また、大分県は新産都市づくりに積極的で、第2期計画を大野川以東の大在、坂の市の地先海面一帯を埋めたて、6、7、8号の工業用地を造成することにしている。10年前までは工場といえば、住友化学、鶴崎パルプぐらいであったこの一帯も、安く豊富な工業用水、広大な用地、20万トン級の船舶が入港できる港湾施設、東南アジア方面への至近距離にあるなど、すぐれた立地条件に目をつけ、次々と大企業が進出している。大分鶴崎臨海工業地帯は、九州経済浮揚への工業開発の拠点として指定された、新産業都市の優等生といわれる発展ぶりを示している。

なお、昭電グループのメンテナンスを担当する昭和工事には、地元企業50数社が〝鶴洋会〟という協力会を結成しており、当社もこの鶴洋会に入会している。